

第 18 次調査（令和 6 年度）の発掘調査について

1 第 18 次調査の研究課題と調査目的

(1) 研究課題

特別史跡加曽利貝塚は、直径約 140m の北貝塚と長径約 190m の南貝塚という 2 つの環状貝塚が 8 字形に連結する。このうち北貝塚は、縄文時代中期の貝塚として著名であるが、貝層や遺構の分布・時期的な変化、すなわち集落構造についての詳細は明らかになっていない。同時に、これまでの調査で検出されている後期の貝層や遺構についても断片的な資料が多く、その位置づけがなされていない。上記の現状に鑑み、「北貝塚の集落構造の解明」・「北貝塚形成の終焉期の解明」・「発掘調査の中長期計画策定のための情報取得」の 3 点を研究課題として掲げ、下記に示した調査の具体的な目的のもと、令和 5 (2023) 年度から発掘調査に着手した。

(2) 調査目的

ア 過去の調査区の位置確認

第 1 次調査第 2 地点（昭和 37 (1962) 年）と第 4 次調査 3 区 C トレンチ（昭和 41 (1966) 年）の位置を確認する。

イ 遺構の分布確認

貝層から中央広場を含む、南北 10m × 東西 50m の調査区を設定し、遺構の分布を確認する。

ウ 貝層の分布と時期の確認

貝層の分布範囲を時期ごとに正確に把握し、貝層形成の変遷を把握する。

2 令和 6 年度の調査計画と成果概要

(1) 調査計画

ア 概要

調査期間 : 令和 6 (2024) 年 9 月 10 日 (火) ~ 令和 6 (2024) 年 12 月 14 日 (土)

現地説明会 : 令和 6 (2024) 年 11 月 30 日 (土) 参加者 260 名

調査面積 : 約 500 m² (南北 10m × 東西 50m) ※令和 5 年度から調査区の拡張なし

イ 目的

① 小竪穴、竪穴住居跡群（中期）の確認

令和 5 年度調査の結果、調査区内の広い範囲にわたって後期の遺構が確認できることが判明した。そのため、確認面が異なる中期の遺構については、サブトレンチによる確認調査を行い、遺構確認面および遺構の分布と密度、時期の把握を行う。

② 柱穴群（後期）の分布と時期の確認

令和 5 年度に調査区西側のほぼ全域で検出した後期柱穴群（住居跡）の拡がりを確認する。調査区東側の約 250 m² のうち、貝層及び昭和 37 年調査トレンチを除く約 100 m² の範囲について、遺構確認面（令和 5 年度掘削面）までの掘削・遺構確認を行う。

③ 貝層の堆積状況と時期の確認

堤状貝層の時期と範囲を確認するため、サブトレンチによる確認調査を行う。必要に応じて最小限の面積で貝層を掘削・回収し、断面観察により貝層の堆積状況を確認する。

(2) 成果概要

ア 小竪穴、竪穴住居跡群（中期）の確認

調査区北壁に沿って、幅 50 cm のサブトレンチを設定し、中期遺構確認面までの掘削を行った。調査区西側については、サブトレンチ内で確認した遺構の一部を掘削し、遺構の種類・時期・堆積覆土の確認までを行った。

① 調査区西側

検出・掘削した遺構は、阿玉台式期の土坑 2 基（SX01・SX11）、加曽利 EⅡ式期の土坑 2 基（SX06・SX07-1）、同小竪穴 5 基（SX03・SX04(05)・SX07-2・SX08・SX09）、時期不詳の土坑（ピット）2 基（SX02・SX10※後期か）であり、この他に平面プランが判然としない遺構が数基ある。遺構確認面の標高はややばらつきがあり、約 29.3 m～29.6m の範囲である。このうち中期の遺構は、3 層（攪拌層＝旧「漸移層」）下面からの掘り込みを確認している。加曽利 EⅡ式期の遺構覆土は、いずれも固く締まり、水平に近い堆積状況を呈する。褐色土主体で、一見すると地山（ローム）と大差なく、ローム粒あるいはロームブロックまたは焼土粒や炭化物粒の包含有無により検出・分層が辛うじて可能であった。

② 調査区東側

令和 7 年度以降、面的に掘削するための情報（どこまで掘削すれば遺構プランの識別が可能か）を得ることを目的として、中期遺構確認面までの掘削を行い、個別の遺構の掘削は行っていない。サブトレンチ底面（中期遺構確認面）の標高は約 29.7 m である。調査区西側と異なり、遺構確認面の標高は高く、遺構覆土の差が明瞭ではあるものの、遺構間の重複が著しく、狭小なサブトレンチでは個別の遺構範囲の認識が困難であった。なお、遺構確認面で地山（ここではローム層）が確認できた箇所はほぼない。

基本層序は調査区西側と大きくは変わらないが、黒色土層（2 層）からは堀之内式を主体とする後期土器（一部で稱名寺式・加曽利 B 式を含む）が、暗褐色土層（3b 層（仮）＝調査区西側の攪拌層（3 層）に対応か）からは阿玉台式・加曽利 EⅡ式を主体とする中期土器が出土し、さらに下層のローム粒・ブロックを多く含む黄褐色土（遺構覆土と想定）からも上記の中期土器が出土している。

イ 柱穴群（後期）の分布と時期の確認

黒色土層から堀之内式を主体とする後期土器が集中して出土した。遺物の出土量がきわめて多く、掘削には相応の力量が見込まれたため、当初掘削予定の約 100 m²から 50 m²弱（調査区北壁から幅 4 m の範囲）に限定して、面的に掘削を行った。遺物の出土範囲が限定的であったため、住居跡などの遺構の存在を想定して土層観察ベルトを設けたが、明確な掘り込み（竪穴）や床面（硬化面）、柱穴、炉跡は確認できていない。今年度の調査終了時で標高約

29.85m（暗褐色土層＝3b層（仮）の上面付近）まで掘削を行った。

ウ 貝層の堆積状況と時期の確認

調査区北壁のサブトレンチを東側の貝層範囲まで拡張し、調査区北東隅から西へ14mの範囲を掘削の対象とした。東西14m×南北50cmのサブトレンチ内に、東西1mを1単位とした区画（1～14）を設定し、各区画を層厚3cm単位で掘削した。なお、貝層を含む掘削土は全量を採取し、次年度以降に乾フルイもしくは水洗選別にかける。

サブトレンチ全体を地表面（GL）から深さ30cmまで掘削したうえで貝層の堆積状況を確認し、区画3・4のみはさらに30cmを掘り下げ、GL-60cmで掘削を完了した。

出土した遺物は、GL-30cmまでは中期（加曽利E式）から後期（称名寺式、堀之内式）が混在し、産廃も多く混じる。一方、GL-30cm～-60cmでは遺物の出土量は少ないが、中期（加曽利E式）にはほぼ限定され、産廃も局所的となる。

全体の貝類組成は、イボキサゴを主体として、これにハマグリ・シオフキ・アサリ・アカニシなどの砂底性貝類が混じる。GL-30cmまではイボキサゴにその他二枚貝が散在し、出土遺物などの内容と合わせると二次堆積の可能性が想定される。一方、GL-30cm以下では、ハマグリ主体の小規模な純貝層やマガキの破碎貝層が局所的にみられ、遺存状態はきわめて良好であった。含まれるハマグリのサイズは殻長20mm～30mmの小型個体が多く、出土遺物の内容も合わせると、貝層の形成時期は中期に帰属する可能性が高い。